

OSPO レベル1 構築ワークショップ

ワークブック

Ver.1.0



独立行政法人情報処理推進機構
Information-technology Promotion Agency, Japan

目次

はじめに.....	4
ワークブックの使い方.....	4
目指すゴール.....	4
ワークブックの対象者.....	4
ワークブックの構成.....	5
各ワークの段階と目的.....	5
巻末資料.....	6
第 1 章 : OSPO スターターキットをベースに、自社の特性に合わせて OSS 推進計画を検討する...8	
第 1 段階 : OSS 活用の「種」を見つける ⚡ (目安 : 15 分)	8
第 2 段階 : OSS 活用を自社の言葉で語る 📝 (目安 : 20 分)	10
第 2 章 : ステークホルダーにメリットを訴求する.....12	
第 1 段階 : 誰に、何を伝えたいか ⚡ (目安 : 15 分)	12
第 2 段階 : 相手に響くメッセージを組み立てる 📝 (目安 : 20 分)	14
第 3 章 : 開発者にとってのメリットを言語化する.....18	
第 1 段階 : 開発者が OSS に感じる「良いこと」 ⚡ (目安 : 15 分)	18
第 2 段階 : 開発者にとってのメリットを自社の言葉で語る 📝 (目安 : 20 分)	19
第 4 章 : 管理者にとってのメリットを言語化する.....21	
第 1 段階 : 管理者が OSS に感じる「良いこと」 ⚡ (目安 : 15 分)	21
第 2 段階 : 管理者にとってのメリットを自社の言葉で語る 📝 (目安 : 20 分)	22
第 5 章 : OSPO 設置についての戦略を言語化する.....25	
第 1 段階 : OSPO を「どのようにしたいか」を考える ⚡ (目安 : 15 分)	25
第 2 段階 : OSPO 設置の計画を立てる 📝 (目安 : 20 分)	27
アウトプット.....29	
Mission (ミッション) : OSS 活動の目的とビジョンを定義する。.....	30
Incentive (インセンティブ) : ステークホルダーの関与を促す動機とベネフィットを明確にする.....	31
Compliance (コンプライアンス) : 法的・技術的なルールとガバナンスを確立する.....	32
Engagement (エンゲージメント) : コミュニティとの関わり方を設計する.....	33

改訂履歷.....	34
奥付.....	35

はじめに


本ワークブックは、OSPO の構築を始めようとしている企業・組織の担当者が、自社の OSS 活用戦略を体系的に考え、言語化するための実践的な演習資料です。IPA 主催の企業向けワークショップ「OSPO レベル 1 構築ワークショップ」のために開発されました。

ワークブックの使い方

本ワークブックは、まず個人で各問いに答えてから、チームで持ち寄って議論することを想定しています。個人で「分からない」「知らない」と感じたことも、チームで共有することで、誰に相談すべきか、何を調べるべきかが見えてきます。ワークショップ内で取り組む場合も、ワークショップ外で活用する場合も、「個人で考える→チームで議論する」という流れを意識して進めてください。

アイコンの見方

 直感的に・素早く書き出すワーク

 じっくり考えて言語化するワーク

目指すゴール

本ワークブックに取り組むことで、自社の OSS 活用に向けた思考が整理され、ステークホルダーへのメッセージや推進計画の骨子を言語化できる状態を目指します。

現時点で「分からない」「知らない」という答えも OK です。むしろ分からないところを知ることで、社内でどのような人に協力してもらおうと良いのか、進むために準備していくと良いのかが見えてきます。このワークを通して、OSS に向き合うことへの感覚と気持ちを一緒に作っていただければ幸いです。

ワークブックの対象者

本ワークブックは、主にこれから OSPO¹の構築を始めようとしている企業の担当者やリーダー層を対象としています。現時点で OSS に関する高度な専門知識を持っていなくても問題ありません。「自社の OSS 推進に貢献したい」「体制を整えたい」という意欲をお持ちの方であれば、どなたでも活用いただけます。

具体的には、以下のような課題や目的を持つ方に最適です。

¹ OSPO (Open Source Program Office) : 企業や組織において OSS の戦略的な活用と健全なコントリビューションを推進するための枠組み。OSPO は単なる管理部門ではなく、OSS を通じて社内外とつながり、共創や技術革新を推進する「橋渡し役」としての役割も担っている。

- **何から始めるべきか模索している方**：OSS の利活用を推進したいが、具体的な手順や最初の一步が分からない方。
- **初めて体制構築に取り組む方**：OSS の社内活用や管理ルール作り（ポリシー策定など）に初めて取り組む方。
- **基礎から実践まで学びたい方**：OSPO の概念や社内での役割について、基礎知識から実践的な計画策定までを学びたい方。
- **自社に合った計画を作りたい方**：ワークショップで他社の事例や考え方を参考にしつつ、自社の文化や現状に合わせた独自の推進計画を描きたい方。

本ワークブックは、個人の学習だけでなく、開発者、管理者、法務・知財担当者など、異なる立場にいるメンバーがチームとして対話しながら進めることも想定して設計されています。

ワークブックの構成

本ワークブックは、OSS 活用の戦略を段階的に深掘りし、自社の特性に合わせた、OSS 活用に向けた思考の整理と言語化を目的としています。全体は以下の 5 つの章で構成されています。

1. **OSPO スターターキットをベースに、自社の特性に合わせて OSS 推進計画を検討する**：OSS 活用の出発点となる、自社の現状理解と目標設定を行います。
2. **ステークホルダーにメリットを訴求する**：OSS 活用の推進に必要な関係者と、彼らに響くメッセージを明確にします。
3. **開発者にとってのメリットを言語化する**：開発者の視点から、OSS がもたらす具体的な価値を考えます。
4. **管理者にとってのメリットを言語化する**：管理者の視点から、OSS がもたらすビジネス上のメリットを考えます。
5. **OSPO 設置についての戦略を言語化する**：OSPO をどのように立ち上げ、運用していくかの具体的な計画を立てます。

各ワークの段階と目的

ワークは 3 つの段階で設計されており、このワークブックでは第 2 段階までをカバーしています。

第 1 段階：「種」を見つけるワーク

この段階では、OSS 活用に対する漠然としたアイデアや関心をキーワードとして自由に書き出します。深く考えすぎず、直感的な言葉で答えることで、潜在的なニーズや課題を顕在化させることが目的です。思いつくままに複数書き出して OK です。

- **何をするか**：自社の事業、ソフトウェア開発の役割、OSS 活用の現状、そして抱えている課題について、思いつく限りの言葉を書き出します。
- **なぜ重要か**：これは次の段階で思考を深めるための土台作りです。OSS 活用を個人的な関心事から、組織的な課題へと昇華させるための第一歩となります。

第 2 段階：「言葉」にするワーク

第 1 段階で洗い出したキーワードを使い、より具体的で論理的な文章にまとめます。この段階では、OSS 活用を自社のビジネスや文化と結びつけて考えます。

- **何をするか**：自社が OSS に期待すること、OSS 活用が重要である理由、そして OSS 活用を進める上で特に力を入れたいことを言語化します。
- **なぜ重要か**：このアウトプットは、OSPO スターターキットをカスタマイズする際の具体的なヒントとなります。漠然としたアイデアを、他者に伝えられる明確なメッセージに変えることができます。

第 3 段階：「ホームワーク」としての実践

ワークショップで得た思考と、第 2 段階で作成した文章を基に、実際のテンプレートをカスタマイズする作業です。

- **何をするか**：本ワークブックの問いで言語化した内容を、テンプレートに反映させ、自社の実情に合わせたドキュメントを完成させます。
- **なぜ重要か**：この段階で初めて、思考が具体的なドキュメントとなり、社内での OSS 活用を促進するためのツールとして機能し始めます。このドキュメントを社内に公開し、フィードバックを得ることで、ドキュメントを継続的に改善していくサイクルを開始します。

巻末資料

このワークブック全体を通じて、OSS 活用のための思考プロセスは以下の 4 つの柱に集約されます。最後に自分で問いに答えてまとめてみてください。

- **Mission (ミッション)**：OSS 活動の目的とビジョンを定義する

- **Incentive**（インセンティブ）：ステークホルダーの関与を促す動機とベネフィットを明確にする
- **Compliance**（コンプライアンス）：法的・技術的なルールとガバナンスを確立する
- **Engagement**（エンゲージメント）：コミュニティとの関わり方を設計する

第 1 章 : OSPO スターターキットをベースに、自社の特性に合わせて OSS 推進計画を検討する

第 1 段階 : OSS 活用の「種」を見つける ⚡ (目安 : 15 分)

このワークでは、OSS 活用について深く考えず、頭に浮かんだキーワードやイメージを自由に書き出します。知らないことや分からないこと、考えたことがないことは「分からない」など率直に書き出しましょう。1つの付箋に1キーワード、1文章で書きましょう。

1.1.1. 自社はどのような会社ですか？

1.1.1.1. どのような製品やサービスを売っていますか？

※ 複数ある場合は製品・サービスごとに 1.1.1.1~1.1.1.5 を書く

1.1.1.2. 顧客（ユーザー）は誰ですか？

1.1.1.3. 自社の自慢できる場所は何ですか？

1.1.1.4. 自社が追求する価値はどのようなことですか？

1.1.1.5. どのような人が関わっていますか？

1.1.2.ソフトウェア開発は、自社でどのような役割を果たしていますか？

※ 観点例

- ソフトウェアは、売っている製品の一部ですか？
- ソフトウェアは、社内の仕事で使われていますか？
- ソフトウェアは、ユーザー向けのサービスですか？

1.1.3.今、仕事で使っているツールを教えてください。

※ 書き方例：ソフトウェアやツールの名称（例：Linux、GitHub、Visual Studio Code）と、なぜそれを使っているか

1.1.4.OSS を使うことでどのような「困った」ことや「もっとこうなったらいいな」がありますか？

※ 例

- ライセンスのルールが難しくてわからない。
- OSS のセキュリティが心配。
- もっと最新の技術を使いたい。
- そもそも OSS が何かが捉えきれていない。

第2段階：OSS活用を自社の言葉で語る (目安：20分)

このワークでは、第1段階で出てきたキーワードをもとに、OSS活用を自社の文脈に合わせて文章にまとめます。第1段階で知らなかったり、分からなかったりした時は、社内の誰に相談すると良さそうかを書き出しましょう。社内で思いつかない場合、どのようなことを調べると良さそうか、何から始めると良さそうかを書き出しましょう。

1.2.1. 自社がOSSに期待していることは何ですか？

※ 観点例

- 自社が大切にしている価値観（例：効率、品質、成長など）と、OSSはどのようにつながると思いますか？
- OSSを活用することで、どのような「コスト」を減らしたり、「新しいこと」を始めたりすると良さそうでしょうか？

1.2.2. 自社にとってOSS活用はどのような重要性を持つと考えられますか？またはどのようにOSSを使うと良さそうですか？

※ 例

- ハードウェアの会社（製造業など）：開発におけるコスト削減、開発の生産性向上
- ソフトウェアの会社（サービス業など）：OSSをサービスの中核技術として活用、エンジニアスキルアップ

（思いつかない場合は、第1段階のキーワードを眺めて考えてみましょう）

1.2.3.OSS 活用を進める上で、特に力を入れたいことは何ですか？

※ 観点例

- 「人」に関することですか？（例：エンジニアの採用、教育）
- 「ルール」に関することですか？（例：ライセンス管理方針、セキュリティポリシーの策定）
- 「お金」に関することですか？（例：コスト削減）

1.2.4.ワークで考えた情報を社内の誰に、どのような目的で使ってもらおうと良さそうですか？

※ 観点例

- 開発者や管理者に、OSS の良さを伝えるためですか？
- 経営層に、OSS 活用の重要性をわかってもらうためですか？
- 社内みんなで、OSS の活用方針を議論するためですか？

第 2 章 : ステークホルダーにメリットを訴求する

第 1 段階 : 誰に、何を伝えたいか ⚡ (目安 : 15 分)

このワークでは、OSS 活用について話すべき相手と、その人たちが関心を持つであろうことを想像して書き出します。個人名でも役職でも、部署でも構いません。具体的に思いつかない場合、どのようなことを知っているが良いのか、どのようなことを社内では実施しているが良いのかを想像しましょう。複数いる場合は、複数書き出してみましよう。

2.1.1. 自社の中で、あなたの OSS 活用案に「Yes」と言う必要があるキーパーソンは誰ですか？どのような立場の人たちですか？（例：開発者、マネージャー、経営者、法務担当者など）その人たちは、社内でどのような影響力を持っていますか？

2.1.2. 「OSS」と聞いて、それぞれのキーパーソンが思い浮かべそうなことは何だと思えますか？下記の例がそのまま当てはまると思う場合は、「他には？」とも考えてみてください。

※ 例

- 開発者：最新技術／新しいことへの挑戦
- マネージャー：コスト削減／セキュリティリスク
- 経営者：コスト削減効果への期待／自社の競争力・ブランド価値
- 法務担当者：ライセンス条件の確認事項／知的財産上の留意点

2.1.3.キーパーソンが、OSS を好意的に捉えるのは、どのような事ですか？どのような時ですか？彼らがあなたの活動に協力してくれるための具体的な動機（インセンティブ）は何ですか？

※ 例：コストが下がった時／新しいアイデアが生まれた時／社員の満足度が上がった時

2.1.4.キーパーソンが「OSS を活用しない場合の不利益」は何ですか？

※ 例：機会損失／競争優位性の喪失など

第2段階：相手に響くメッセージを組み立てる (目安：20分)

このワークでは、第1段階で書き出したキーワードをもとに、それぞれの相手に響くように具体的なメッセージを文章にします。文章を考えるのに社内の誰に相談すると良さそうか、どのようなことを調べると良さそうかもメモしましょう。何より、まずは思いついたことを書いていきましょう。

2.2.1. 経営層に伝わる「OSS活用のミッションとビジョン」を作成してください。

2.2.1.1. 経営層が目指す「自社の成長戦略」とOSS活動をどのように結びつけますか？(Mission)

- ※ 観点例：自社の企業理念、ミッション・ビジョン・バリュー(MVV)をオープンソース活動とどのように結びつけますか？

2.2.1.2. OSSを通じて、自社が「3年後にどのようなになっているか」の未来図をどのように示しますか？(Vision)

- ※ 観点例(経営層の関心度)：経営層がOSSを単なるコスト削減ツールではなく、企業戦略の一環と捉えていますか？

2.2.2. 「不安」を解消し「OSS を使う理由」に転換するための具体的な回答を作成してください。

2.2.2.1. 法務部門が抱える「ライセンス管理上の懸念」に対し、「当社は〇〇という体制で管理します」とどのように説明しますか？

※ 観点例：OSS の利用、コントリビューション、公開に関する明確な社内ポリシーをどのように策定しますか？

2.2.2.2. 管理部門が抱える「セキュリティリスク」に対し、「〇〇というプロセスで安全性を確保します」とどのように説明しますか？

※ 観点例（セキュリティ要件）：自社のサービスや製品には、どの程度のセキュリティレベルが必要ですか？

2.2.3.開発者、管理者、経営層それぞれに響く「最重要メリット」を一つ選び、簡潔に説明してください。

2.2.3.1. 開発者向け（Incentive）：彼らのキャリアや日々の業務に最も影響するメリットは何ですか？

2.2.3.2. 管理者向け（Business Value）：プロジェクト管理やチームの生産性に直結するメリットは何ですか？

2.2.3.3. 経営層向け（Strategy）：投資対効果（ROI）や競争優位性に直結するメリットは何ですか？

※ 観点例：自社が「エンジニア主導」「ビジネス主導」「トップダウン型」のどのタイプに近いかによって、次章「開発者にとってのメリットを言語化する」の重要度をどのように調整すべきですか？

※ 目安：エンジニア主導＝開発者が技術選定をリードする組織、ビジネス主導＝プロダクトオーナーやビジネス部門が方向性を決める組織、トップダウン型＝経営層の意思決定で OSS 活用が進む組織

2.2.4.このメッセージング戦略を、社内にどのように「展開」しますか？

2.2.4.1. 誰が、いつ、どのような形（社内報、会議、研修など）でメッセージを伝えますか？

※ 観点例：自社のMVVにおいて、「協働・協業」「社会貢献・還元」「イノベーション・挑戦」「透明性・オープン」のどの価値観が特に強調されていますか？

2.2.4.2. 展開後のフィードバックをどのように集め、メッセージやルールを改善していくサイクルをどのように作りますか？

第3章：開発者にとってのメリットを言語化する

第1段階：開発者がOSSに感じる「良いこと」 ⚡（目安：15分）

このワークでは、OSS活用が開発者の日々の仕事やキャリアにどのような良い影響を与えるかを自由に書き出します。思いついたことを、そのままキーワードやイメージで書き出してください。

3.1.1.OSSを使うことで、どのような「ムダな仕事」がなくなりますか？

※ 例：1から作っていたものが減る／テストの時間が減る

3.1.2.OSSを使うことで、どのような「新しい学び」がありますか？

※ 例：新しい技術／より良い開発手法／他のチームや社内の人との交流

3.1.3.OSSを使うことで、どのような「問題解決」が楽になりますか？

※ 例：困った時に自分で直せる／誰かに頼らずに解決できる

3.1.4.OSSにコントリビューションすることは、自分にとってどのような「成長」になりますか？

※ 例：スキルアップ／名刺代わりになる／自信がつく

第2段階：開発者にとってのメリットを自社の言葉で語る (目安：20分)

このワークでは、第1段階で書き出したキーワードをもとに、開発者にとってのOSS活用のメリットを、自社の文脈に合わせて具体的な文章にします。

3.2.1. 「車輪の再発明の回避」を、自社の例で説明してください。

3.2.1.1. 自社の中で、どのような無駄な開発が起きているですか？

3.2.1.2. OSSを使うことで、その無駄をどのようにしてなくしますか？具体例を挙げてください。

3.2.2. 「品質」や「開発手法」の良さを、どのように伝えますか？

3.2.2.1. 自社の「品質に対する考え方」（例：とにかく信頼性、とにかくスピード）に合わせて、活用するOSSの品質をどのように評価・説明しますか？

3.2.2.2. 自社の開発スタイル（例：ウォーターフォールやアジャイルなど）に合わせて、OSSコミュニティの開発手法から学べることをどのように紹介しますか？

3.2.3. 「自分で問題を解決できる」ことのメリットを、自社の状況に合わせて説明してください。

3.2.3.1. 自社の製品やサービスに高い可用性が求められる場合、OSS を活用することのどのような利点を強調しますか？

3.2.3.2. 社内に OSS のソースコードを読める人材が限られている場合、どのように対処しますか？

3.2.4. 「成長」や「キャリア」に関する不安を、どのように乗り越えますか？

3.2.4.1. 「OSS にコントリビューションすると、遊んでいると思われるのではないか」という心配にどのように答えますか？

3.2.4.2. 経営層の「従業員が OSS 活動でスキルを身に付けて他社に転職してしまうのではないか」という不安に対し、自社ではどのようなケアが必要になるでしょうか？

第4章：管理者にとってのメリットを言語化する

第1段階：管理者がOSSに感じる「良いこと」 ⚡（目安：15分）

このワークでは、OSS活用が管理者やプロジェクトにどのような良い影響を与えるかを自由に書き出します。深く考えず、頭に浮かんだキーワードやイメージを挙げてください。

4.1.1.OSSを使うことで、どのような「コスト」が減りますか？

※ 例：ライセンス代／社内研修／特定の会社への発注費用

4.1.2.OSSを使うことで、リスクはどのように低減されますか？

※ 例：ベンダーに頼りすぎている状態／セキュリティの不安／自社の事業が急に続けられなくなる
こと

4.1.3.OSSを使うことで、チームの「仕事のやり方」はどのように変わりますか？

※ 例：プロジェクトのスピードが上がる／効率が良くなる／新しいアイデアが生まれやすくなる

4.1.4.OSSを使うことで、「人材」に関わるどのような良いことがありますか？

※ 例：エンジニアのスキルが上がる／社員のモチベーションが上がる／エンジニアの採用に効果がある

第2段階：管理者にとってのメリットを自社の言葉で語る (目安：20分)

このワークでは、第1段階で書き出したキーワードをもとに、管理者にとってのOSS活用のメリットを、自社の文脈に合わせて具体的な文章にします。

4.2.1. 「コスト削減」を、自社の状況で説明してください。

4.2.1.1. どのような「コスト」を一番減らしたいですか？

※ 例：ライセンス代／外部への委託費用／研修費

4.2.1.2. そのコストがどの程度削減されると、どの程度の効果（メリット）が見込めますか？それはなぜそう思いますか？

4.2.2. 「リスク」を、自社の状況で説明してください。

4.2.2.1. 今、特定のベンダーに頼りすぎていて「困ったこと」はありますか？それはどのようなことですか？

4.2.2.2. OSSを使うことで、どのような「トラブル」や「不安」を減らすことができますか？具体的な例を挙げてください。

4.2.3. 「仕事のやり方」や「人材」のメリットを、あなたのチームに合わせて説明してください。

4.2.3.1. あなたのチームの仕事のうち、「もっと効率を上げたい」部分はどこですか？

4.2.3.2. OSS は、チームの生産性をどのようにして上げられそうですか？

4.2.3.3. チームメンバーが OSS への関与を通じて成長することは、あなたのチームにとってどのような価値がありますか？

4.2.4.これらのメリットを、あなたのチームや自社の上位層にどのように伝えますか？

4.2.4.1. 「雰囲気が良くなる」という抽象的な言葉ではなく、「〇〇%コストが減る」「〇〇時間が節約できる」といった、具体的な数字で説明してください。

4.2.4.2. 過去の失敗や大変だった経験（例：プロジェクトの遅延、予算オーバーなど）があれば、それと比べてどのように説明すると説得力が増しますか？

第 5 章 : OSPO 設置についての戦略を言語化する

第 1 段階 : OSPO を「どのようにしたいか」を考える ⚡ (目安 : 15 分)

このワークでは、OSPO がどのような役割を果たすべきか、そして誰に協力してほしいかを自由に書き出します。深く考えず、頭に浮かんだキーワードやイメージを挙げてください。

5.1.1.OSPO が解決したい、一番大きな課題は何ですか？

※ 例

- ライセンスのルールがわからない。
- OSS を使いたいのに、上司が許可してくれない。
- セキュリティが心配。

5.1.2.OSPO は、自社の中でどのような「専門家」と話す必要がありますか？

※ 例 : 弁護士 / 人事担当 / CTO / 経営戦略担当

5.1.3.OSPO は、どのような「活動」をすれば自社の役に立ちますか？

※ 例

- 勉強会を開く。
- OSS の専門家を雇う。
- 社内のルールを作る。

5.1.4.OSPO の「成功」とは、どのような状態だと思えますか？

※ 例

- みんなが安心して OSS を使える。
- OSS を使って、新しいサービスが生まれた。
- 自社が「OSS 利活用企業」として有名になった。

第2段階：OSPO 設置の計画を立てる (目安：20分)

このワークでは、第1段階で書き出したキーワードをもとに、OSPO をどのようにして立ち上げ、動かしていくか、具体的な文章にします。

5.2.1.なぜ、今 OSPO が必要なのですか？

5.2.1.1. 自社の今の状況（例：コスト削減が必要、DX を急いでいる、エンジニア採用の訴求力を高めたい）と、OSPO の必要性をどのようにつなげますか？

5.2.1.2. OSPO がなければ、どのような問題が起きそうでしょうか？またその問題をどのように説明しますか？

5.2.2.OSPO を動かすために、誰にどのようにして協力してもらいますか？

5.2.2.1. どの部署の人たち（例：法務、知財、人事、広報）と、どのような話をする必要がありますか？

5.2.2.2. OSS の知識や経験が豊富な「チャンピオン²」を、どのようにして見つけ、巻き込みますか？

² チャンピオン：特定テーマを組織内で推進する旗振り役・推進リーダーのこと。ここでは組織内で OSS 活用の重要性を理解し、推進を担当する主要な人物または小グループのことを指す。技術的知識と組織影響力を備え、OSS 活用の意義を社内に伝播させる役割を担う。

5.2.3.OSPOの「最初の一步」は何にしますか？

5.2.3.1. 一番解決したい課題（例：ライセンス管理）から始めますか？それとも、成功しやすそうな小さなプロジェクト（例：社内勉強会）から始めますか？

5.2.3.2. 最初はどのようなルールやプロセスを作りますか？

5.2.4.OSPOを「育てる」ために、どのようにして進めますか？

5.2.4.1. 最初は完璧でなくても、まずルールを公開し、みんなの意見を聞いて改善していくサイクルをどのように作りますか？

5.2.4.2. OSPOの活動が、自社の目標達成にどのように貢献しているかを、どのような方法で伝えていきますか？

アウトプット

ここまでのワークで考えたことを OSPO 設立に向けて大きく 4 つのカテゴリーで整理します。

Mission（ミッション）：OSS活動の目的とビジョンを定義する。

問いに答える時にプライオリティを考えるための要素になることを考えてみてください。

- 自社の企業理念、ミッション・ビジョン・バリュー（MVV）を OSS 活動とどのように結びつけるか。
- 経営層の関心度：経営層が OSS を単なるコスト削減ツールではなく、企業戦略の一環と捉えているか。
- 既存の企業文化：既にオープンな文化や協業の価値観が根付いているか。
- ブランド戦略：採用や市場におけるブランド力向上が喫緊の課題か。
- 自社の MVV において、「協働・協業」「社会貢献・還元」「イノベーション・挑戦」「透明性・オープン」のどの価値観が特に強調されているか。
- MVV の浸透度：従業員が自社の MVV をどれだけ理解し、体現しているか。
- 社会からの期待：自社の業界や事業において、社会貢献や透明性がどの程度求められているか。
- これらの目標は、現在の自社のプライオリティとどのように連携しているか。
- タイムライン：目標達成までの緊急度や期限。
- 部門間の連携：目標達成のために、複数の部門（技術、人事、法務など）の連携がどの程度必要か。
- OSS 活動を単なる技術導入ではなく、企業理念を実現するための手段としてどのように位置づけるか。
- 組織の変革意欲：組織全体が新しい働き方や文化を受け入れる準備ができているか。

Incentive（インセンティブ）：ステークホルダーの関与を促す動機とベネフィットを明確にする

問いに答える時にプライオリティを考えるための要素になることを考えてみてください。

- それぞれのステークホルダーにとっての具体的なメリットは何か。
- 動機づけと課題への対処
- 短期的な視点に陥りがちなことに対し、OSS 活動による中長期的なメリットをどのように説明するか。
- OSS 推進の課題が企業の認知不足の場合、開発者向けにどのメリットを強調すべきか。
- ポリシーに関する問題がある場合、管理者や経営層を説得するために、開発者の目線かつビジネスの ROI を考慮した上で、どのようなメリットを提示すべきか。
- 自社が「エンジニア主導」「ビジネス主導」「トップダウン型」のどのタイプに近いかによって、第3章「開発者にとってのメリットを言語化する」の重要度をどのように調整すべきか。
- 開発者のメリットが企業全体にとってどのような価値を持つのかを、このセクションでどのように表現するか。

Compliance（コンプライアンス）：法的・技術的なルールとガバナンスを確立する

問いに答える時にプライオリティを考えるための要素になることを考えてみてください。

- OSS の利用、コントリビューション、公開に関する明確な社内ポリシーをどのように策定するか。
- 法務リスク：OSS ライセンス違反や知的財産権侵害のリスクがどの程度あるか。
- 業界規制：自社の業界に特有のコンプライアンス要件（金融、医療など）があるか。
- セキュリティ要件：自社のサービスや製品には、どの程度のセキュリティレベルが求められているか。
- IP の重要性：自社の IP が事業においてどの程度重要か。
- ベンダー依存度：特定のベンダーへの依存度が高くなっていないか。
- レガシーシステム：ベンダーサポートが終了する可能性のあるレガシーシステムが存在するか。
- OSS の採用が規制要件や監査基準にどのように影響するか。監査可能性や透明性を確保するためのプロセスは何か。
- 監査の頻度と厳格さ：外部監査の頻度や、要求される透明性のレベル。

Engagement（エンゲージメント）：コミュニティとの関わり方を設計する

問いに答える時にプライオリティを考えるための要素になることを考えてみてください。

- 自社が関わるべき OSS コミュニティやプロジェクトはどれか。その選定基準は何か。
- 自社とどのくらいの責務や技術スタックが密接に関係しているか。
- 現時点での自社のエンゲージメントレベル（利用・コントリビューション・公開）を把握した上で、どのように段階的にコントリビューションや公開へと発展させていくか。
- コミュニティとの継続的で良好な関係を中長期的に維持するために、どのような戦略を立てるか。
- オープンな開発文化を社内に醸成するために、どのような取り組みを実施するか。
- OSS 活動を通じて、開発者の技術的スキルだけでなく、コミュニケーション能力やプロジェクト管理能力といったソフトスキルをどのように育成するか。
- OSS 推進の「チャンピオン」となる人物をどのように特定し、育成し、動機づけるか。
- リーダーシップの重要性：組織内で OSS 活動を牽引する強力なリーダーシップが必要か。

改訂履歴

版 (Ver.)	改訂日	主な改訂内容
1.0	2026/4/16	初版発行

奥付

題名

OSPO レベル1 構築ワークショップ ワークブック

執筆

ガオリユウ（高柳 謙）（IPA 専門委員・Dialogue Design）

編集協力

今村 かずき（IPA デジタル基盤センター ソフトウェアエンジニアリンググループ）

レビュー

渡邊 歩（IPA 専門委員・株式会社日立ソリューションズ）

服部 佑樹（IPA 専門委員・ギットハブ・ジャパン合同会社）

発行

独立行政法人情報処理推進機構

発行年月日

2026 年 4 月 16 日

著作権

本ワークブックの著作権は独立行政法人情報処理推進機構に帰属します。

ライセンス

本ワークブックは Creative Commons Attribution 4.0 International License（CC BY 4.0）

(<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>) の下に提供されています。

ただし、本ワークブック内の一部に第三者の著作権を含む場合は、その部分に別途表示がある場合を除き、本ライセンスの適用外となります。

免責事項

本ワークブックは、その内容に関する有用性、正確性、知的財産権の不侵害等の一切について、当組織が如何なる保証をするものではありません。

